教会内部を詳細に描写した南蛮屏風

国指定重要文化財

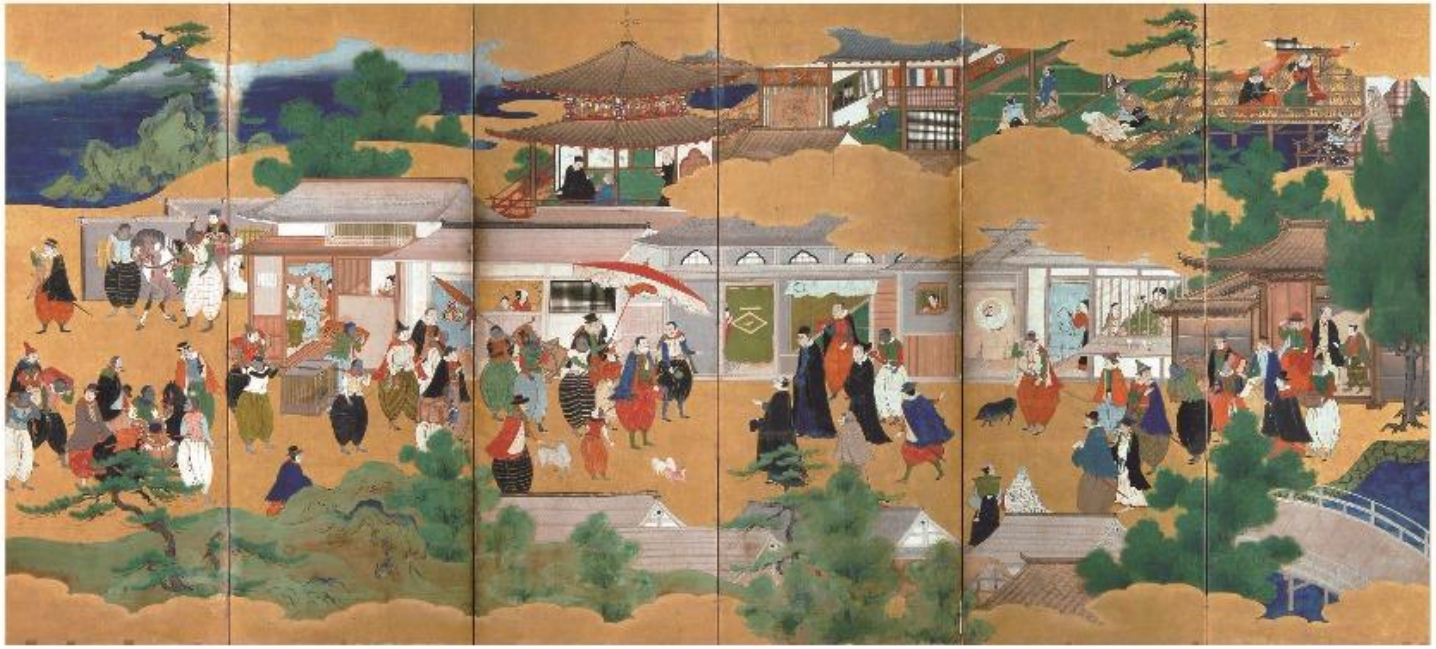
3 南蛮屏風（なんばんびょうぶ） 六曲一双

紙本金地着色 屏風装

（各）縦一六四・〇cm 横三六二・六cm

桃山時代～江戸時代前期 十六～十七世紀

南蛮文化館所蔵



日本の海岸にたどり着いた南蛮船から、カピタンの監督のもと、積荷を降ろしている様子を左隻（下の図版）に、日傘を差しかざされたカピタンとその一行が上陸し、町屋の前で聖職者や日本滞在中のポルトガル人等に迎えられる様子を右隻（上の図版）に描いた南蛮屏風。打ち寄せる波の描写や、鮮やかに発色した海の群青が特徴的である。描かれた積荷に注目すると、左隻のカピタンの背後に虫、南蛮船から小船の従者に渡されているのは孔雀の羽、右隻の一行の中にはアラビア馬や孔雀、山羊、洋犬などがみえる。

本展の趣旨からいうと、とりわけ注目されるのは、右隻の町屋の背後に描かれた南蛮寺（教会）の様子であろう。一扇目には、頭巾付の修道服を着たフランシスコ会士とおぼしき聖職者の手にキスする武士と、祈りを捧げる南蛮人が、二扇目には、十字をきったり頭をたれたり、手を組んで祈りを捧げる武士と日本人女性が、三扇目には、格子の向こう側に座ったイエズス会士とおぼしき聖職者から「ゆるしの秘跡」を受ける武士の姿が描かれている。当時のキリシタンの振る舞いを克明に描写しており、じつに興味深い。（山田）

ガラシャの父・光秀のすがた

10 明智光秀像 一幅
絹本着色 軸装
縦八〇・九㎝ 横三七・七㎝
桃山時代 慶長十八年（一六一三）六月六日賛
本徳寺所蔵

玉（ガラシャ）の父・明智光秀の肖像。光秀は、美濃守護土岐氏の庶流明智氏の出身とされるが、若い頃の事績は知られていない。近年の研究では、室町幕府の奉臣であったとも、藤孝の家臣であったともいう。織田信長に仕えて頭角をあらわし、近江滋賀郡や丹波を領して織田家中の出世頭といわれたが、天正十年（一五八二）、本能寺で主君を襲撃、信長を滅ぼした。ただ、まもなく羽柴（豊臣）秀吉の巻き返しにあい、山崎合戦後に死去する。

肖像は、小紋高麗縁の上畳に座し、侍烏帽子を被り、雪花模様の小袖の上に、腰のあたりが縞模様の白い素襖をまとった姿で描かれる。右手には扇を握り、高貴で理知的な顔貌である。蘭秀宗薫による賛の年記が慶長十八年（一六一三）であることから、没後二十年を経過してから制作されたものとみられる。

本像が伝わる本徳寺（現大阪府岸和田市）は、もとは海雲寺と称し、光秀の遺児・南国妙珠が鳥羽荘（現大阪府貝塚市）に創建し、それを移建したものと伝えられている。（金子）

（二行目より）
○加羅者様、始ハ建仁寺之祐長老に三十四五則参学被成候しか、忠興公大徳寺の参学よりハ心安ものなるへしと被仰候、其後加々山少左衛門か母吉利支丹にすゝめ申候しか、常々殊外物祝ひをなされ候て、軍しけく事忙敷時分、武具衣裳之事につけても日を余り御揆被成、はかの行かぬるか気毒さに、吉利支丹ハ物を打破りにして、はか行へしと被思召、其時分迄ハ御法度にてハなし、共に勤て彼宗門に被成しか、後ニハ無用也と被仰けれとも、最早御間込有て御承引なかりし也、大坂にて御生害之後、小倉之吉利支丹寺にて絵像に御書せ被成けるに、吉利支丹ハ死を潔する所を尊むにより、火焔之中に焼させらるゝ半身を書たりけれハ、此様にむさとしたる形を書ものかとて、宗門を改浄土宗になされ、極楽寺と云寺へ御位牌を被遣けり、其時のいるまんにこはんと云者有けるか、そちも他宗になれ、是非かへよと被仰けれハ、奉畏候、乍去長崎へ今一度参り候てころひ候ハんと申上けれハ、一段也、さあらはとて金五十両ことつてなされ、伽羅なと買て参れと被仰けるに、長崎より何くへやらん行てみへす、後ニ青山大膳亮好利之内にゐると聞召、にくきやつ也と呼返して打殺んと被仰ける処に、青山氏より御侘言被仰しかて御免なされし也、
（○後略）

細川家の歴史書が伝える入信経緯

53 **忠興公譜** 五冊の内
紙本墨書 冊子装
縦二七・九㎝ 横二〇・〇㎝
江戸時代前期 十七世紀成立
熊本県立美術館所蔵

ガラシャがキリスト教へ入信した経緯については、細川家の歴史書にも記事が残る。ここに掲げた冊子は、十七世紀末に分家の宇土細川家で編纂され、明和三年（一七六六）に書写された「細川家譜」の一冊。忠興の生涯を取りあつかった「忠興公譜」である。

これによると、そもそも「加羅者様」は「祐長老」のもとへ参学していた。「祐長老」とは、藤孝の甥で、天正十四年（一五八六）に建仁寺二九二世となった英甫永雄である。ところが、彼女が縁起をかつぎ、合戦の時も武具や衣装、日取りなどを気にして物事が進まない様子をみかねた「加々山少左衛門か母」が、考えが変われば、キリスト教を勧めた。後日、忠興は（キリスト教は）「無用」と言ったが、ガラシャはすでに話を聞き込んでおり、（忠興の仰せを）承知しなかったという。

文中にみえる「加々山少左衛門」は、キリシタン大名高山右近の旧臣加賀山隼人。文禄年間より忠興に仕えたという。家族そろってキリシタンであり、禁教令後も棄教せず、元和五年（一六一九）に殉教した。その母とガラシャが接点を有したタイミングについては検討の余地も残るけれど、様々な人物との関係の中で彼女が入信した様子が示唆されており、じつに興味深い。（山田）

金銀象嵌で装飾された日本製の十字架

54 **秋草竹に鶴図十字架** 一点
金属製 象嵌
縦四・五㎝ 横三・二㎝
桃山時代 十六～十七世紀
南蛮文化館所蔵

金銀の象嵌で装飾を施した金属製の十字架。表面をみると、金象嵌で秋草をあらわし、その中央には銀象嵌された桔梗の花。上部には金象嵌されたトンボが、横木の左の方には銀象嵌された虫（蟷ヵ）が配されている。反対の面には、金象嵌で伸びやかな竹が縦木・横木いっぱいに描かれ、その生え際に金・銀象嵌された鶴が配される。禁教の影響もあり、こういった十字架の伝世例はあまり聞かないが、日本で布教用に制作されたものと考えられている。

なお、伝えられるところでは、この十字架はガラシャの遺品だという。たしかに、金銀象嵌の手の込んだ装飾や、表面中央に配された桔梗の花は、その伝承に信憑性を与えるものではある（桔梗は明智家の紋）。

南蛮文化館の所蔵に帰す以前は、三菱財閥の創業者岩崎弥太郎の孫で、児童養護施設「エリザベス・サンダースホーム」を設立して二千人もの混血児を育て、浜伏キリシタン遺物の収集家でもあった浜田美喜の愛蔵品であったという。（山田）

京都の公家が記したガラシャの最期

78 言経卿記（ときつねきょうき） 三十五冊の内

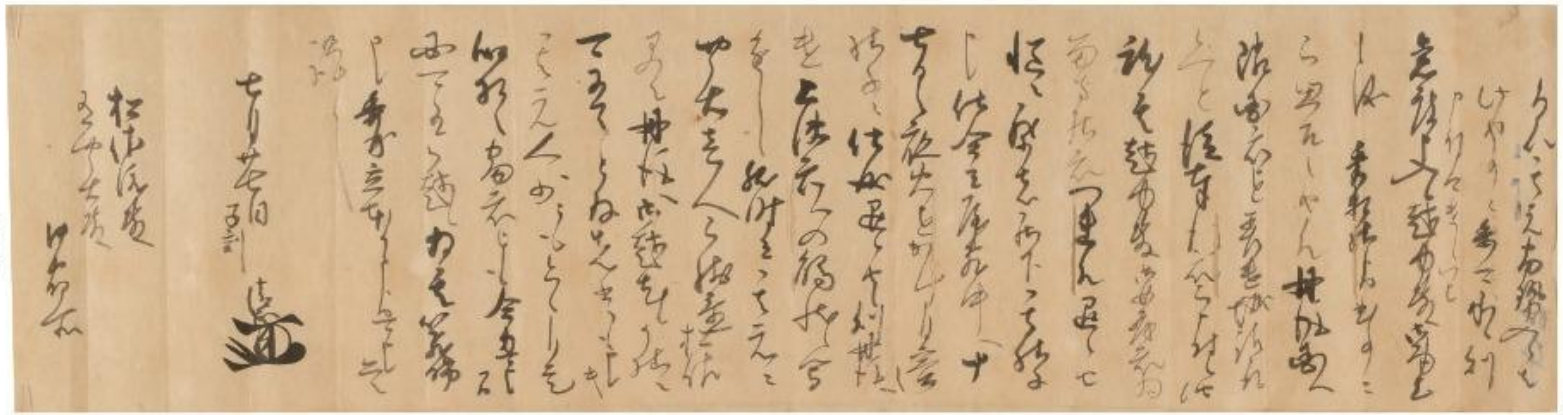
山科言経
紙本墨書 冊子装
縦二六・二cm 横二一・九cm 厚六・五cm
桃山時代 慶長五年（一六〇〇）七月十八日条
東京大学史料編纂所所蔵

西軍諸将は慶長五年（一六〇〇）七月十七日付で徳川家康弾劾の檄文（No.75）を発し、挙兵するが、それ以前から大坂玉造（現大阪市中央区）の細川屋敷に人質提出を要求していた。家康から石田三成の娘婿福原長堯の旧領を与えられていたことが問題視され、細川家は西軍方からまっ先に狙われたのである（No.81）。西軍方の要求を受けた細川屋敷では、ガラシャと家臣たちが対応を協議。最終的にこれを拒絶し、最期を迎えることを選択する。

『言経卿記』は、公家の山科言経がしたためた日記。途中に欠落があるものの、天正四年（一五七六）から慶長十三年まで記事が残り、同五年七月十八日条にはガラシャの最期について記されている。これによると、彼女は前日夜に大坂玉造の屋敷で十二歳の息子と六才の娘を殺害、屋敷に火を放ち、小笠原某等の介錯で「自害」したという。注目すべきは、二人の子どもを殺害したという証言。系図や家譜に該当人物は確認されず、細川家もこの事実を否定するが、当時はかかる風聞がまことしやかに語られていたのであろう。真偽はともかく、細川家と親しい言経にしてみれば、衝撃的な話であったに違いない。（山田）

一、大坂ニ長岡越中守女房衆自害、同ムスコ二人、同イモトカオ等、母切殺、サシ殺也云々、私宅火ヲ懸テ、小笠原一荒川一等カイシャク、則腹ヲ切也云々、越中守ハ関東ニ有ニ云々、昨夜也云々、

78



（墨書ノ人書）
「（墨引）　加主計
松佐渡殿
有四良右殿　清正
御宿所　」

79

清正が耳にしたガラシャの最期

79 加藤清正書状（かとうきよまさしょじょう） 一通

松佐渡（松井康之）・有四良右（有吉立行）宛
紙本墨書 巻紙
縦一七・〇cm 横七一・〇cm
桃山時代（慶長五年（一六〇〇）七月二十七日付）
松井家文書 松井文庫所蔵
八代市立博物館未来の森ミュージアム寄託

ガラシャの悲劇的な最期は、西軍のみならず、東軍の人質政策にも影響を与えかねないものであり、当時から大きな話題となっていた。

この文書は、肥後に留まっていた加藤清正が、豊後木付城（現大分県杵築市）を預かっていた細川家の家老松井康之と有吉立行に対し、西軍挙兵後の畿内情勢を伝えた書状。大坂玉造の細川屋敷に居た「御女房衆」の動向を報じる「屋敷中へ十七日之夜に火をかけ、自害之様子ニ仕成、退候」という一文が注目される。これによると、人質提出を要求する西軍方に対し、「御女房衆」は火を放って「自害」したようにみせ、屋敷を脱出したという。しかし、実際に脱出したのは、幽斎の姉宮川尼と長男忠隆の妻千世。ガラシャは脱出していなかった。『言経卿記』、慶長五年（一六〇〇）七月十八日条の記事（No.78）も掲案すると、ガラシャの最期に関する情報は、混乱をともないながら広がっていたとみられる。

ちなみに、清正の正室清浄院はというと、家臣の機転で大坂の屋敷を脱出。船底に隠れて瀬戸内海をくだり、豊前の黒田如水の支援を受け、熊本まで無事にたどり着いている。（山田）

尚以、其元番勢人候者、
此返事ニ委可承候、則
中付可遣候、以上、
急度申入候、越中殿（細川忠興）御身上
之儀、秀軒（前田玄以）様令曲事ニ
被思召候由にて、丹後国へ
隣国衆を差遣、城請取
候へと、従奉行衆被申付候由候、
就其、越中殿御女房衆、為
留守居衆つれ候て退候由、
慥ニ、我等者罷下、其様子
申候、仕合者、屋敷中へ十
七日之夜火をかけ、自害之
様子ニ仕成、退候由候、則、丹後へ
遣、上使衆への触状之写
進之候、然時者、其元ニ
四良右（有吉立行）殿
早々丹後へ御越尤候、か様ニ
可有之と存、先書へも申候キ、
其元、人少ニも候ハヽ、自是
似相之番衆をも、令刀可申候間、
必可有御越候、為其、以飛脚
申候、委曲、立本（立花宗茂）かた令可申候、恐々
謹言、
七月廿七日　清正（加藤）（花押）
子刻
松佐渡殿
有四良右殿
御宿所

第五章　死後に形づくられたガラシャのイメージ

逆輸入されたキリシタンイメージ

ガラシャの死後、その生涯が語り継がれたのは、日本だけではない。信仰を守りつつ最期を迎えた模範的なキリスト教徒として、彼女はカトリックの布教史に名を刻み、オペラの題材にされるなど、ヨーロッパで広く知られるようになっていた。

そうして形づくられたキリシタンイメージは、明治時代に日本へ逆輸入される。太政官が翻訳した『日本西教史』の出版により、ガラシャがキリスト教を篤く信仰していた様子が明示されたのである。従来の「節女」「烈女」イメージと交わりつつ、キリシタンイメージは日本でも広がり、やがて十字架を身にまとう肖像が描かれはじめた。私たちのよく知るガラシャの姿は、こうして生まれたのである。（山田）

最期を迎えんとするガラシャのすがた

109　今古誠画　浮世画類考之内　慶長五年之頃　一点

小林清親
木版多色刷　二枚続
縦三六・五cm　横四九・一cm
明治十八年（一八八五）
個人所蔵

明治時代に活躍し、西洋絵画の技法を駆使する「光線画」で人気を博した浮世絵師小林清親が描いたガラシャのすがた。左上の場面解説は「石田三成が諸大名の妻子を大坂城へ招き、人質にせんと画策するところ、美才衆に秀で、相歌を能くする細川忠興の妻は、夫の胸中を察し、敵が囲むのを待たず、二人の幼子に、祖父明智光秀が織田信長を殺した報い、恨むべからずと説諭して刺し殺し、その後自殺した。家臣の河北石見は屋敷に火を放ち、小笠原勝斎（少斎）は長刀で介錯した」と記す。「子ども二人殺害説」は、ここでも採用されている。

画面に目を向けると、障子や襖が倒れた室内に、ガラシャと二人の家臣がみえる。やや赤味がかった表情のガラシャは、打掛の右肩をはずし、左手に短冊を、右手に筆をとる。その手前には、懐紙を巻いた短刀。辞世の句をしたため、これからまさに最期を迎えんとするところであろう。左側に座した河北石見は、何事かを報告している模様。長刀を抱えたまま膝をつき、左方向を注視する小笠原勝斎（少斎）は、外の様子を探っている風情である。（山田）

キリシタンイメージで描かれた最初期のガラシャ像

117 ガラシャ夫人像（ふじんぞう） 一幅

橋本明治
絹本着色 掛幅装
縦一一七・八cm 横五五・二cm
大正十一年（一九二二）
島根県立美術館所蔵

日本画家・橋本明治の初期作品。橋本作品といえば力強い輪郭線が特徴だが、本作品の場合、控えめな輪郭線が流れるように柔らかなフォルムをかたちづくっている。ロザリオを帯びた姿で手を組み、目を閉じる彼女は祈りを捧げているのであろうか。グレーの画面の中で散る桜が清貧の句を想起させ、ガラシャの儚さを際立たせるかのようだ。本作品以前、絵画においてガラシャをキリシタンとして描き出すことは稀であった。今後さらなる検証が必要ではあるものの、現時点で本作品はキリシタンとしてのガラシャを描いた、最初期の作例ということになる。

当時の橋本は十九歳。画家に憧れ、故郷・松江（現島根県松江市）で日本美術学院による通信教育を受ける一介の中学生であった。彼はこの頃岡本綺堂の戯曲『細川出興の妻』（大正期に夢中になっており、そのことが制作につながったという。本作品は島根県展に出品され見事入選。さらに上京後に入門した川端画学校のコンクールにおいて、実質的な最高賞である一等首席に選ばれている。橋本の原点とも言うべき作品であると同時に、キリシタンとしてのガラシャイメージが地方にも伝播していった様子をうかがうことができる一点である。

（林田）

明智光秀論

稲葉　継陽

一　光秀の虚像と実像

光秀論の古典に高柳光寿『明智光秀』(吉川弘文館、一九五八年)がある。高柳がこの本の末尾に記したように、光秀の評価は信長のそれを離れてはありえない。当たり前のことだが、重い事実である。信長の業績に革命性を見いだす通説的信長論によれば、「本能寺の変」は「反革命」と理解されるよりほかはない。だから、新しい光秀論は新しい信長論なくしては成り立ちえない。

「反革命」は近代歴史学における光秀論であるにしても、光秀を史上稀なる「謀反人」とする評価は、いつ生じたのだろうか。「本能寺の変」の直後だろうか。京都の吉田神社の神主で細川藤孝(幽斎)の従兄弟にあたり、信長や光秀とも親密だった吉田兼見の日記『兼見卿記』は、この点を考える上で重要である。

「本能寺の変」が起きた天正十年(一五八二)の日記は、正月から六月十二日まで、つまり六月二日に信長を本能寺で殺害した光秀が同十三日に山崎で秀吉に敗北する前日までを記した本と、その全体を書き直した上で、六月十三日以降年末まで書き継いだ本の、二種類が存在する。いま前者を①、後者を②としよう。①で兼見は、六月二日早朝の「本能寺の変」の様子を書きつけたあと、次のように記す。

光秀は信長方を悉く討ち果たし、大津(現滋賀県)に移動した。私は馬に乗って粟田口まで走り出て光秀に対面し、吉田家・吉田神社の領地を保障してくれるよう直接頼んだ。

兼見はじつに本能寺の変の当日に、光秀を新たな天下人と認め、信長のもとで保障されていた自分の権利の安堵を懇願していたのである。このとき光秀のもとには、兼見のみならず京都の公家や寺社勢力が群参していたにちがいない。

そればかりではない。六月五日に信長に替って安土城に入った光秀のもとに、勅使が派遣される。新しい天下人光秀に朝廷厚遇の政策を求めるためである。勅使には誰あろう吉田兼見が任じられた。七日に安土に駆けつけた兼見に対して光秀は、なんと「今度謀叛之存分」、つまり信長殺害の理由について「雑談」したという。話の内容が日記に書かれていないのは残念であるが、ここで光秀は自身の正当性をおおいに主張したことであろう。九日、光秀は中国筋から取って返して来る秀吉軍を迎撃するため、京都に戻る。そのとき、近江から洛中への入口にあたる白川あたりには、光秀を出迎える公家衆がつめかけたという。まさに、威風堂々たる天下人光秀であった。

ところが、六月十三日に光秀が秀吉に敗れると、兼見は日記を中断し、その日からの記事を別本に書き継いで、六月十二日までの記事を書き直しそれと合体させ、②を仕立てて定本とした。興味深いのは、書き直した②では、「本能寺の変」の当日に自分が光秀と対面して領地の保障を懇願したこと、七日に安土城で光秀本人から謀反の真意を聞いたこと、すなわち①の記述の核心部分が、完全に削除されていることである。

なぜ兼見は日記を書き変え、事実を隠蔽したのか。理由は②の六月十三日条、すなわち光秀・秀吉の山崎での戦い当日の記述を見れば分かる。そこには、光秀の敗北を知った京都の人びとは、これこそ「天罰眼前」だと評したと記されている。光秀の「謀反人」たる評価は、「本能寺の変」によってではなく、その十一日後に、秀吉に敗北したまさにその瞬間に定まったのであった。信長殺害後の光秀と懇意にした事実は、その時点で兼見にとって、そして京都の支配層にとって、闇に葬られるべき事柄となったのである。光秀の天下人としての振る舞い、光秀に取り入る朝廷や高級貴族たちの奔走の事実も、なかったことにされた。そして勝者秀吉もまた、自身の権力の正統性を主張するため、「光秀は最悪の謀反人」だとの作文を諸方面にバラまいていたことが知られている。

政治的結果をもとに光秀に押し付けられた虚像。いまそれを引き剥がし、彼の実像に迫ることが求められている。

二　光秀の登場と織田権力の性格

(一)光秀の登場

光秀の出自の詳細を知ることは困難であるが、美濃国出身であったことは間違いない。『兼見卿記』元亀三年(一五七二)十二月十一日条に、光秀が美濃の「親類」と連絡を取り合っていたとあるからだ。しかし、これまでは永禄九年(一五六六)以前の光秀の動向を知ることはできなかった。ところが本展覧会に出品された細川家老筋の米田家に伝わった医薬書「針薬方・獨見集」[№11]によれば、遅くとも永禄八年以前に、「明智十兵衛尉」が「高嶋田中城」(現滋賀県高島市)に「籠城」し、外科薬を調合していた事実が明らかになった。つまり本史料によって、将軍足利義輝の暗殺、その弟義昭と側近細川藤孝らの近江への脱出の頃に、すでに光秀は京都と若狭・越前とを結ぶ交通の要所である湖西地域を基盤に、軍事活動を展開していたことが判明したのである。

美濃出身の光秀が表舞台に登場する契機をつくったのは、細川藤孝であった。永禄九年、藤孝は越前にあった足利義昭に「御伴衆」の一人として付いていたが、そこに「足軽衆」の一人として光秀もいた(黒嶋敏)。光秀敗死の後、奈良興福寺の多聞院英俊は、光秀は藤孝の「中間」(下級奉公人)から身を起したのだと日記に書いていた。湖西で縦横に活動する光秀を越前にいた義昭と結び付けたのは藤孝であり、藤孝はまた義昭と信長を結び付け、永禄十一年九月には義昭・信長連合政権を樹立させるにいたる。

光秀は有能であった。信長は彼を京都統治と軍事の両面で重用した。永禄十二年四月からはみずからの奉行人として、義昭・信長文書とともに発給される行政文書の署名者に登用した。ともに登用されたのは木下秀吉や丹羽長秀、村井貞勝らであった。これ以後、天正三年(一五七五)二月までの間に、光秀が洛中洛外の統治に関して発給した文書がじつに二十五通も現存する(久野雅司)。翌永禄十三年四月の若狭・越前攻めでは、義昭・信長連合軍の先遣隊として近江・若狭国境の熊川宿に乗り込んでいる[№18]。湖西・湖北・若狭・越前を結ぶルート上は、光秀無名時代からのホームグラウンドであった。実務能力と要地における人的ネットワークとを有する光秀は、秀吉や長秀らとともに、京都における織田権力